資料

参考人出席要求候補者名簿

県内の複数の市では分娩できる病院や診療所がないなど、分娩できる施設の減少は基礎自治体だけの問題ではなく、県の課題となっています。

産科医に過重な労働が課されている中で妊産婦の求める安心、安全、満足を満たすために、正常妊産婦に対しては、助産師が妊娠、分娩、産じょくまで一貫したケアを行うことの有益性が述べられています。

今回、現在の産科医療について研究をされておられる２名の方より、女性の「産む」という生理的な機能を尊重した妊娠・出産・育児の取組や、産科医と助産師の役割分担と連携等についてご説明いただきます。

２月７日（金曜日）午後１時 00 分から

○　奈良女子大学　名誉教授

松岡　悦子　氏

2008 年 9 月奈良女子大学生活環境学部教授、2019 年 3 月定年退職。

ご自身の出産を機に、妊娠・出産の比較文化をテーマに、さまざまな地域の出産にまつわる民俗や儀礼、出産介助者の歴史的変化、また現在の産科医療について研究されてこられました。

○　ＳＢＳＫ自然分娩推進協会　代表
高山赤十字病院　周産期母子・小児医療センター長

荒堀　憲二　氏

1979 年白治医科大学卒業。日本専門医機構認定産婦人科専門医。日本産婦人科学会認定指導医。

日本国内の病院だけでなくケニアでの国際協力でも経験を積み、病院長や病院管理者も務めるなど、40 年以上にわたり、母子保健医療や産婦人科の臨床に携わっておられます。

2017 年には母子保健部門で厚生労働大臣表彰を受賞。現在も臨床医として活動しながら「自然なお産」への取り組みを精力的に行っておられます。